
バイオハザード

eclair13farron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード

【Nコード】

N6646W

【作者名】

ecclair13farron

【あらすじ】

マスターは追い込まれていた

「間にあえ!!」

だが、化け物はマスターの脚に噛みついてきた

マスターは転倒し、化け物の群れに喰われていく

「ちっ・・・痛みすら感じねーな」

マスターは心の中で思った

意識は遠くなり二度と明けない深淵へと引きずり込まれていった

バイオハザードChapter1（前書き）

私今回初めて挑戦します

バイオが大好きで

発売日にリバイバルセレクションを買ったのですが
なんと、その前日入院

あらら

ドジを踏んだせいになかなかプレイできませんでしたw

初心者ですが「まあ、見てやるか」みたいなノリで見て下さい^^

バイオハザード Chapter 1

Chapter 1

この長い夢は、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか
普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚

気を抜くことすらできない

大切な人は死に、街は一晩で壊滅

人間の形をした化物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる

「生き残る」

その言葉は何よりも重い気がしたのだ

俺の中での一生のトラウマであり続けるだろう……

休日の昼

ウォードはバーで飲んでいた

昼間から飲むのはいただけないが、仕事がなかったり、中毒で飲んでいるわけではない

彼の趣味なのだ

極度の酒好きに加え、ガンマニアである

後者は彼が元軍人だったので分からないこともない
自宅には酒のコレクションや、ハンドガンからマグナムに至るまで
武器をコレクションしている

話を戻すと、なぜバーで飲んでいるかと言うと

同僚の女性警察ラムが遊びの誘いを断ったからである

特別気があるわけではないが、一人で行動することが苦手なウォードはラムが断ったと

分かった時からここにきて酒を飲もうとした算段である

バーのマスターが話してきた

「なあ、ウォード」「最近話題になっている人喰い病って知っているか？」

「ああ、警察の中でもメインで取り上げられているからな」とウォードは返した

「それに、俺が専属している特別警察ではそれに備えて訓練で最近
厳しいよ」

人喰い病

最近この街で噂されている（ニュースにもなっている病気である）
病気であると言っても見た人がいないからあくまで比喻である

人間が人間を喰らいつくとかそういう噂である

実際死体が見つかった時、ぐちゃぐちゃな姿で見つかったのを映像
で見たウォードである

ウォードはすでに結構な量の酒を飲んでいた

が、酒を飲んでも飲まれるな主義であるウォードはまだまだいける
口だ

時間はそれなりに経っており、ガラス越しに空が暗んできた頃だった

「ガチャ」

「いらつしゃい」とマスター

しかし、様子が変だ

なんというか、インフルエンザで青ざめた人がふらふらしているみたいだ

うめき声も聞こえるし、目も白目をむいている

一般の客が心配して近寄ろうとした時、ウオードの直感が働いた

「そいつに近寄るな!!」

脚のホルスターからハンドガンを引き抜いて構えた

「動くな!動くなと言っている!!」

よるよると近づいてくる

発砲した

「パン、パン」

左足に二発、しかし、動きが止まらない・・・

「こいつ・・・」

次は普通の人間なら動けなくなるだろう急所を撃った

「パン」

止まらない

今までで初めてだ

強盗、テロリスト、そいつらの中でも撃たれても根性か何かで動く奴がいる

だが、動くといっても痛そうにはするし動きが鈍くなる

今のこいつにはそれが全くない

「マスター、ショットガンを貸してくれ」

マスターの生い立ちこそ知らないが、同じガンマニアとしてバーにはホンモノが飾ってある

だからこそウオードと話が合うのだろうが

「ガチャ、ズトオン」

胴体を撃ちぬいた

ようやく倒れ、動かなくなった

「もしかしたら、これが人喰い病・・・なのか!？」
マスターは言った

それと同時に、他の客が「これが最近噂になっている」何たらと騒ぎだし

パニックになった

店から何人が逃げ出した

「おい、中の方が安全だここに」とウオードが言う前に消えていった

「うわあ何だ来るな」「ぐわああああー」

すぐに聞こえてきた声は、間違いなく今さっき出て行った連中のそれだ

客の一人がドアに鍵をかけた

「おいおい、喰われているぞアイツら」「どうなっているんだよお」

「ひい!」

男は尻もちをついた

ガラスに奴らが張り付いている

「お前らの肉も喰わせる」とは言っていないが、動作で分かる低下しているだろう知能で強化ガラスを懸命に叩いている

人間よりも力が強いのは見ていれば分かる

「おい、皆各々武器をマスターから貰え」

「ここはマスターと俺で時間を稼ぐから、裏口から逃げる」

「近くの病院に逃げ込め!」

「それでいいよな? マスター! 試し撃ちがしたかったんだろ!？」

とウオードが言った

「へっ! 悪い冗談言ってくれるなよ」「こっちだってちびりそうなんだ」

「まあいい、このデザートイーグルを試食させてやるから感謝しな化け物」

強化ガラスの先にバリケードとしてイスやテーブルをを固めた

クモの巣のようなヒビが徐々に大きくなっていく

!!!!

バリンという音とともに奴らがガラガラッと流れ込んできた
すでに他の客はここにはいない

ウォードがショットガン

マスターがデザートイーグルを構え発砲した

やはりハンドガンと違い、威力が高い

頭部に一発撃ち込むときれいに吹き飛ぶ

マスターのデザートイーグルは言うまでもない

マスターのテンションも上がってきている

が、続々と流れ込んでくる化け物どもに弾が追いついてこなくなってきた

二人とも勇敢に戦ってはいるが、人間の姿と何の変色もないこいつ等と

化け物じみた耐久力のこいつ等を相手にしていて恐怖や驚きが少なくとも隠せないでいた

ショットガンの弾は切れウォードはマシンガン

マスターは相変わらずデザートイーグル

「くそっ弾切れか・・・」マスターがポケットからマガジンを取りだそうとした時

手が滑った

無意識に手が汗ばんでいた

無理もない、こんな状況で平然を保てる人間など銀河系に一人もないだろう

もう一つしかマガジンがなかったので、マスターは拾おうとした
もちろん奴らとの距離を保って

だが、倒れている奴のそばに落ちたマガジンを拾おうとした時であった

想像はつくだろう

「倒れている」だけで「死んでいる」訳ではなかった

「噛まれた」

やっと食べれると言わんばかりの噛む力である

「うおおおお！」マスターは叫び、銃で思い切り頭を殴った
奴の動きは止まった

だが、手首の肉が見えるほど食いちぎられた

「マスター大丈夫か!？」

ウォードも気が抜けない状態で、マスターを見ることができないが
声で分かったのだろう

「ああ、だが手首を噛まれた」「骨が見えてやがる」

マスターが無事で（無事ではないが）ウォードは安心した

「そろそろ俺らも移動しよう、マスター」

「ああ、そうだな」「奴らとの距離が近いからな」

「まあ、お前だけ行けやウォード」

「アンタは?」

「なーに、俺はさつき脚を噛まれている」「一緒にいても足手まといだ」

実際マスターは、噛まれた手首のせいで気が散り、さらに銃の反動
に対応しづらくなり

脚を二か所噛まれていた

「死ぬ気か!？」

「バカヤロー、こんなとこでくたばるかってんだ」「いいから先行
け」

本来警察官である自分が残るべきなのに・・・

「警官のお前が、先病院に行った奴らを護ってやれ」

「くっ、分かった」「死ぬなよ」

ウオードは正義感が強い

マスターは一般市民

残るのは自分と考えるべきだが、他の奴を頼むと言われたら

人数からしてそちらを選ぶ

ウオードは裏口へ向かった

「ケツ！一体何体いるんだ、お前らは」

「デザートイーグル」反動が大きいこの銃は一般人が撃つことによ
って

健康を保証できない

それを何発も撃ち込むマスターの実力はそうとうなものだが、弾が
切れた

ハンドガンでは対処できない

「さて、俺もそろそろ逃げるか」

裏口までは数十メートル

脚を引きずりながら向かった

「よしっのろまめ！これで・・・」追いつけないだろ
と言おうとした時である

裏口が開いた

ゆっくりと・・・

マスターは血の気が引いた

裏口から入ってきた・・・

よく考えれば、先に逃げた連中が何事もなく裏口から逃げれた方が珍しい

これだけ侵入してくるコイツらは裏口からでも入ってこれるハズだからだ

いや、手はまだある

コレクションの一部をバーに持ってきている部屋がある
それも裏口の近く

ただパスワードが必要だ

「イエローシャンパン」これだけ打つのに
間違えなければ二秒で打てる

ただ、今は動揺、緊張、手首のけが

この複数のマイナスによって時間がかかっていた

カチカチカチ

あとは「パン」だけだ

距離は二メートル

イける

と思っただが誤算だった

「飛びついてきた」

よりによって脚にしがみつき、噛みついたのだった

バランスが崩れよろけたスキに

待ってましたと言わんばかりに、奴らがのしかかる

耳はかじりとられ、腹からは内臓が飛び出し、喉も喰われて声が出

ない

「ハハっ、痛みすら感じねーな」と心の中で思った

視界は暗くなり、意識も遠のいた

そして深淵に引きずり込まれていった

二度と明けることのない暗闇に・・・

・
・
・
・
・
・
・

ウオードは途中化け物に遭遇したが、奴らの遅さと道の広さで相手にしていなかった

マシンガンの弾は切れて、愛銃のハンドガンだけを装備していた病院が見えてきた

「着いたぞ、バーの連中は無事か!？」「マスター生きて来いよ」と心の中で思った

そして、地獄の入口へ吸い込まれて行った

バイオハザードChapter1（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだ続くのは見ての通りです

あまり一つにまとめると疲れますしね

興味があつたら次回も見てください^^

感想、評価気軽にして下さい

駄目だしもちろんOKです

バイオハザードChapter2（前書き）

第2話

かなり遅くなりましたが完成しました

まあ、適当に上から目線でreadしてあげてください

バイオハザードChapter 2

Chapter 2

高くそびえ立つ病院

こういう時にはなおさら大きく見える・・・

夜は気温が下がり「ヒュー」っと風が流れるのを感じる

後ろからは奴らが追ってきているので、さっさと病院に入った
普通の自動ドアは時間帯的に閉まっているので、非常口から入った

「ガチャリ」

鍵を閉めた

ウォードには考えがあった

病院の屋上にへりを呼び助けを待つという考えだ

すぐに救助を要請した

「こちら特別警察ウォードだ、この街は汚染されている」

「人喰い病の影響だ、おそらく」「救助を要請する」

「分かった」「ただ、その病院なら少し時間が掛かる」

それを聞いた後通信機を切った

自動ドアに奴らが、張り付いている

どうやら、非常口から入ってこれない事や、今までの行動からして
知能は相当低いみたいだ

ただ、生命力、食欲といったものが著しく高い
まず、銃を撃つても構いなく近づいてくる

頭を強力な武器で吹き飛ばすのが得策だろう

まだ、奴らに関することはそれくらいしか分からなかった

「さて、バーから逃げてきた皆を探すか」

さつきから他の特別警察に連絡を取っているが、返事がない
女性警官ラムもそこに専属しているが、返事がなかった・・・
「みんな、無事だろうな」

この病院は1階から10階そして屋上がある

一つ一つウオードだけで生存者及びバーの皆を探すのは骨が折れる
ので

人手が欲しかった

その時だった

「ガサッ」音がした

「誰だ!？」

ウオードは愛銃のハンドガンを構えた

「おいおい、撃つなよ」「バーから逃げてきたやつだよ」

「奴らかと思って隠れていたんだ」

その男の名前はマービン

少し挙動不審だが、まあいいと思った

「マービン、これから俺とアンタでこの生存者を捜す」

「何もなければ、たくさんの生存者が見つかるハズだ」「病院だか

らな・・・」

まずは1階からだ

ウォードが左半分、マービンが右半分を担当

マービンはマスターからハンドガンを貰っていたので武器は大丈夫
そうだ

「いいか！もし遭遇したら頭を狙うんだ」

「分かったよ・・・はぁー何でこうなったのやら」

・・・

マービンは普通の会社員

子供が二人いるので本来休日である今日は子供と遊んでいないとい
けないハズだ

だが、妻と喧嘩をしてやけをおこしてバーで酒を飲んでいた

マービンは家族の事が心配で仕方がなかった

本当なら今すぐ家族のもとに行かないといけないのだが
病院の外に出ることは、すなわち「死」を意味する

それを承知で助けに行こうとしたのだが、ウォードに止められた

「今は我慢しろと、あとで必ず助けるから」と

それに生存者を見つけへりに乗ってポイントポイントに降りた方が
効率がいいと言われた

「確かに最終的には家族が助かる確率が上がるかもしれないから我
慢だ」と自分に言い聞かせた

夜の病院は暗かった

ほとんど見えず、緑の非常ランプが不気味さを際立たせるのに役に

たっていた

ガクガクと足が震えていた
病人のためのコンビニの所を通り掛かろうとした時だった

ゴソゴソと物音がした
マービンはへっぴり腰になりながら下手くそにハンドガンを構えた
手の中は汗だくだった

「奴らか!？」

口から心臓が飛び出そうだった

バーから病院に向かう時、捕まった人間がいくらかいた
どうなったのかは分からないが叫び声がしたのが耳にこびりついている

どうなったのかは分からない？

いや、死んだだろう

奴らによって

その奴らが今いると思うとパニックという言葉が可愛く思うほど動揺していた

が、出てきたのは人間だった

「って人間かよ」とマービン
安堵のため息をついた

「人がせつかく酔いをさますもん食ってんのによ……その銃でさ

めたわ」と男が言った

この後さらに奥を探索したが生存者を見つけれなかった

死亡者もいなかったなのでここには「ルイ」というこの男しかいなかった

・
・
・

時は少しさかのぼり

左側へ向かったウォード

マービンを一人で探索に行かせたウォードは心配していた

奴らと直接戦っていない一般市民を一人で探索に行かせるのはあまりにも無謀ではないか？

と自問していた

特別警察である自分がここまで動揺しているからだ

撃つても撃つても近づいてくる奴らは「恐怖」の塊でしかない

と思ったウォードは「いや、今は探索に集中しろ」と自分に言い聞かせた

だが、結局生存者は見つからなかった

死亡者もいないところを見ると先に上の階に上がっているのかもしれない

それに、奴らはどうやらないようだ

真ん中の集合場所に戻るとマービンが一人の男を連れてちゃんと戻

っていた

「マービン、無事だったか！そっちの人は？」

「俺はルイだ、よろしくなおまわりさん」とルイが言った

集合場所の正面玄関の近くにあるガラスのカギのかかった自動ドア
すでに多くの奴らがドアを叩いていた

バーの時より耐久があるので壊れはしないだろうと思った

するとマービンが「エレベーターは動かないな、階段を使うしかない
さそうだ」と言った

確かに左側を探索した時に見かけたエレベーターも動かなかった

普通は動くはずだが・・・

仕方なしに階段を使い、2階の生存者を捜した

「ピシッ」ガラスにひびが入っていた

3階までは空間が1階まで見えていて、つまり見上げたり見下ろす
と1階や3階が見える

診察を主にした1～3階のフロアである

もう1人生存者を発見した
リサという女性だ

看護婦で3階にずっと隠れていたらしい

「ん、ちよつと待てよ?」「バーの生存者じゃないのか!？」とウ

オードは思った

しかも、さつきから奴らが全くいないところを見ると病院内で彼女しか見つからないのもおかしい

「この上の階に何かあるのか？」と思えずにいらなかった
リサも何も話したがらない、やはり何かある

4階

また、右側左側を二手に別れた

ウオード&リサチームとマービン&ルイ

戦闘能力を考えるとこの組み合わせしかない

マービンに通信機を持たせ、いつでも連絡できるようにしておいた
ウオード、マービン、ルイがハンドガンを所持して別れた

ウオードはしらみつぶしに病室を周ったのだが衝撃的だった

皆死んでいる

血まみれだ！しかも奴らに噛みつかれた後ではない
あきらかに第三者のせいだ

「リサはこの光景を見ていて、それで話せなくなったのか・・・？」
と心で思った

最後の病室もやはり残虐な絵が飛び込んでくるだけであった

「ポタ、ポタ」

「！！！！」「何だ！？」「急に上から降って来た液体にワードは驚いた

「な、なんなんだコイツは！？」

「化け物」という表現がふさわしいにも程がある！！

全身真っ赤の皮膚に脳みそが丸見えで、舌がベロンと垂れているし
かも、鋭い爪

戦闘のプロであるワードは驚いた後すぐに冷静になった

「ん！？」

距離がほぼ真上の2〜3メートルだというのに襲ってこない

「こいつ、目が見えないのか？」

やはりワードの直感はあるに違いない

静かに行動すれば問題なさそうだ

ゆっくりと足音を立てずに右側に向かった、マービン&ルイの所へ
向かった

別れる所、つまり中心のところにリサを待機させ右側に向かうと
した時

無線が入った

「ウウ、ワード！化け、化けもんだ、たたたすけてくれ」と

「いいかよく聞け！絶対に物音をたてるなよ！！奴らは目が見えな

い」

「分かったよ・・・早く来てくれ」と小声でマービンは言った

急ぎ足で向かった奥から3番目の病室

奥の隅に二人でしゃがんでおり真ん中の天井に奴が張り付いていた
こっちにゆっくり来いとジェスチャーをした

まず、ルイがゆっくりゆっくりとこちら側へ来た

手や足がぶるぶる震えていたが何とかこちら側へ来ることができた

「さあ、マービンこっちだ」とワードが仕草でやった

そろり

そろりと一歩前へ

しかし、上手くいかなかった

奴のよだれがマービンの肩に落ちた時、マービンが驚いて叫んでしまった

「ポトっ」

「！！！！」「ぎゃーああああ」

「しまった！！」

「ルイ！！ハンドガンの連射だ！」

ウォードとルイが二人でハンドガンを連射した

「バンバンバン」弾丸の嵐だ

奴は天井から落ちて動かなくなった

耐久だけで言うなら奴ら人型の化け物より上だった

これだけではすまなかった

ルイが「おいおい、何だよあれ！」と病室から出て叫んだ

ウォードも病室から出て確認すると、それは地獄絵図だった

さらに奥の病室からさっきの化け物がぞろぞろ出てきた

しかも、遠目にウォードたちが探索した左側からもぞろぞろ出てきている

どうやら繁殖して奴らの巣になっていたようだ

それがさっきの銃声で一斉に出てきたのだろう

「まずい！二人とも走れ」

幸い奴ら人型の化け物と同じで動きはのろまだった
リサと合流して5階に向かった

・
・
・
・

1 階のガラスには奴らの圧力で今にも壊れそうだった
数にして500はいるだろう・・・

バイオハザードChapter2（後書き）

第3話頑張って作ります

いつになるのかな

バイオハザードAnother Chapter（前書き）

まず、タイトルのアナザーがrが抜けていてすいません

時系列アナザー、チャプター1、チャプター2となります

バイオハザード Another Chapter

・
・
・

特別警察のメンバーは10人

元軍人であったり、厳しい訓練を耐えて、筆記試験、体力試験など数多くの試練を乗り越えたものが所属できる、警察のスペシャリスト、そんな風にとらえてほしい

一人は、肉弾戦が得意でテロリストを数多く捕らえるもの

一人は、爆弾処理のスペシャリストであり数多くの爆弾を解除するもの

一人は、医療のスペシャリストであり数多くの薬品を調査し仲間を救ってきたもの

一人は、それら個性豊かな彼らをまとめるリーダーであるもの

・
・
・

休日になる2日前の事であった

特別警察のリーダーである隊長のハイドは最近出勤していない

副隊長であり最年長のエドウィンが今は仕切っていた

「最近の人喰い病、こいつを俺達で調査する」とエドウィン

ホワイトボードに人喰い病の事件が起きている場所が多数書かれていた

そこに2人、4人で調査にあたることになった

それぞれが調査に向かった後、エドウィン達はある場所へ向かった
わずかな手掛かりのもとに

その手掛かりというものは、この都市の病院には恐らく地下が存在しており（もちろん一般市民は知らない）そこが今回の人喰い病と関わっている可能性があると思った

危険があると判断したエドウィンは、マルコ（狙撃？2 援後の？1）とテラ（医療？1）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）の4人で向かうことにした

他の場所はウォード（狙撃？1 戦闘プロ）とラム（爆弾解除、キーピック、医療）

レックス（各操縦のプロ）サム（重火器のプロ）ロイ（万能型）で各場所に散らばった

病院に着いたエドウィンはいつもと同じ光景の病院を眺めていた

「ここ地下に人喰い病に関する情報があるはずだ、気を引き締め

て取りかかるぞ」と言い

地下にいけそうな場所を4人で手分けして探した

小一時間探していると左奥の駐車場のコンクリートに不自然なあとがあるとレイラから連絡が来た

「コンコン」と叩いていると、「カン」という音がする部分が見つかった

まるでマンホールの蓋を叩いたかのような音

その部分に体重をかけると、重みで反対側が浮き上がった

「地下だ！ハシゴがある」とエドウィン

4人は順番に降りて行った

ここの構造はトンネルのようにある程度の広さがあり奥に続いているような造りだった

薄暗く、肌寒いこの場所に4人は益々気が引き締まった

4人とも、ハンドガンを装備して奥へ進んで行った

・
・
・

「クククク、ヒントをやったというのにここにたどり着くまで遅いぞ」「優秀な部下共よ」

薄暗い地下に分かりづらいところに設置してあるだろう監視カメラで4人が侵入してきたのを監視モニターからハイドは待ってたぞと言わんばかりに見ていた

彼らはハイドの、特別警察隊長ハイドの裏切りにより地獄に招待された

これから、絶命を迎えることなど彼らは知らずに・・・

バイオハザードAnother Chapter（後書き）

アナザーということであっさりと読めるようにしました

ネタがないとかでは決して・・・

バイオハザードChapter3（前書き）

意外にも見て下さっている方がいて、コメントまで残してくれるという

私にエネルギーを下さった皆様の為にも急いで書き上げました^^

気軽に見て下さい

バイオハザードChapter 3

・
・
・

4階の化け物を振り切り5階へたどり着いたウオード、マービン、ルイ、リサ

実際4人とも生存できたのは幸運と呼べる他なかった

いや、こんな状況で幸運などと言う単語は存在しない！

目の前に人の形をした奴が3体

ウオードはハンドガンで頭を撃ちぬく

「バン、バン、バン」あまたの訓練で身に付いた正確な射撃技術は、奴らの脳天をきれいに撃ちぬいた

奴らは動かなくなった

「ナースか・・・化けもんになったんだな」とウオード

一般市民であるマービン達にはこの一瞬の出来事に啞然としていたウオードがいなかったら、あつという間に丁度3人と3体でいい具合に料理されるに決まっている

現に銃を抜けなかったのだから・・・

「お前ら、常に気を抜くなよ、死にたくなければ」

「ああ、すまねえ」とマービン

リサは4階の化け物にまだ驚いて震えている状態

ルイは何でこんなことにと、ブツブツ呟いていた

いずれにしてもこの状態はマズい

今後の探索に支障をきたす可能性が大だ

それに彼らに貸した銃には弾がほとんどないハズだ

ウォードはまだ数発に加え、マガジンが2つある

ここは自分1人で5階を探索する方が得策だと考えた

こういう時に、特別警察のメンバーがいてくれたらと思う・・・

一般市民を決して馬鹿にしている意味ではないが

それに正直、ウォード自身も正常ではなかった

テロリストの方が何倍もマシだ

メンバーがいてくれたらと思った時にあることを思い出した

おとといの特別警察がそれぞれ、人喰い病の探索に向かった時に

自分とラム以外のメンバーは帰って来なかったのを思い出した

連絡も取れなかったので、ラムと二人で彼らが探索に向かった先へ行ったが彼らはいなかった

それをふと思い出し、心配になった

・・・

「クククク、やはり素晴らしい射撃能力だな」「ウオード」

特別警察はいた

10階の管理室、裏切り者の隊長「ハイド」・・・

「さて、1階のゾンビ共が侵入しそうだな」「ここはウオードの為にもちよつとした遊びをしよう」

ハイドは緊急ロックシステムを作動させ（警戒音なく）6階の階段へ続くシャッターを閉めてしまった

・・・

5階には人型の奴らが数体いるだけで、生存者は0だった

それに、もっと最悪なのが6階に通じる階段のシャッターが閉まっているということだ

5階に着いた時には開いていたのだから、第三者の仕業に違いない
ここで働いているリサイわく、3階と10階に制御装置があるらしい
緊急時に（火災や地震）どちらでも行けるように両方設置してある
らしい

当然第三者は10階にいたと考え、我々は3階にある制御装置でシ
ャッターを開ける必要がある訳だ

だが、「戻る」ということはすなわち「死」を意味するかもしれない
4階の化け物だつてまだいる

奴らは聴力が劣っているため、乗り切れたとしてもそれでもリスク
が高い

が、誰かがやらないと先に進めない

「俺しかないわな・・・」

ウオードが誰よりも先に言おうと思った

だが、ルイが言った

「俺は、機械関係の仕事をしてんだから」「俺しかないわな」

恐怖への震えが隠し切れていない・・・それでもルイはそう言った

特別警察であるワードでもロックを解除できる可能性はある

「あんたが下に降りたら、誰が俺らを守るんだよ」とルイ

「ま、生きて帰るから心配すんな」「酔っているから遊び感覚で行ってきてやるよ」

「おい、待・・・」とワードが言おうとしたそばから、ルイは下に降りて行った

ルイの言っていることは正しい

ここでルイを待ってじつと我慢した

「・・・くそっ」

・・・

500体はいるだろうゾンビの群れ

ガラスの限界が来た

「バリイイン」という豪快な音とともにゾンビが侵入した

やっと入れて人間の肉を喰える、そんなやる気のある化け物どもに見える・・・

・・・

4階に下りたルイ

化け物どもがまだ大量にいるかと思っただ、全くいなかった

「巢に戻る習性でもあるのか？」と一人つぶやいた

「まあいい、3階に急ぐぞ」

3階に行く途中で人間の化け物には出くわさなかったルイは

自分はラッキーな奴だと思っていた

その考えはすぐに無くなるのだが・・・

3階に下りて驚いた、否、絶望した

1階から3階は上と下が見えるようになっていたフロアだ

「見てしまった」1階に侵入している化け物どもを

数が尋常じゃない

「なんだよこれええ!？」ルイはパニック状態

早い奴ではもう2階の階段を上っている奴もいる

ルイは急いで管理室へ向かった

この状況で精神を強く保ち、逃げ出さなかった彼は称賛に値する

実際ルイが行って正解だった

手早い動作でシャッターを解除する、ここまでは誰でもできる

だが、ルイは思った

10階から閉められたのなら、解除してもまた閉められたら意味がない

ならば、3階から10階の管理室を操作できないようにいじくつてやろうと

ウオードにはできない機械関係の仕事人ならではの事をした

ただ、シャッターを閉めるのとは違い10階を操作できなくする

いわゆる、妨害は時間が必要なものだった

管理室に置いてあるパソコンをカタカタと懸命に操作している

ルイがいる3階の管理室も監視モニターはある

1階にいた奴らの半数は2階に侵入しているのが見えた

「もう少しだ・・・」とつぶやくルイ

3階に少し侵入してきた奴ら

「よしっできた！これで10階からはシャッターの操作は出来ない」

「俺以上の腕があれば別だが」

「ガチャツ」と管理室を開けた時「ここまでか・・・」と言っしかなかった

両サイドから化け物が、人間を見つけたのを確認し一斉にこちらに向かってきた

瞬間的に管理室に戻った

そこでルイはあるものを取りだした

ウオードがくれた手榴弾

もしかしたら予想していた、いやこうなることが分かってウオードは手榴弾をくれたのだろう

さらに、奴らに殺されるくらいならと突破口より死に方をくれたのかもしれないとルイは思った

もちろんウオードは突破口として渡したのだが、今の彼は突破する気はない

安全ピンを外した

鍵を閉めていた管理室は、圧力ですぐに壊れ奴らの侵入を許した

「へっ、お前らも道連れだ」

「ズドオオオン」管理室から煙が上がり奴らは一緒に吹き飛んだ

勇気ある者と一緒に・・・

・・・

爆発音がワード達にも聞こえた少し後

ワード達はシャッターが開くのを待っていた

「ルイ・・・」とワードが呟いた時

シャッターが開いた

「よしっ行くぞ！」

「おいおい、ルイを待たないのか！？」とマービン

「待つ必要はない・・・」

「おいっアンタそれでも警察か！？いや血の通った人間かよ！！！」
めずらしく口調の荒いマービン

だが、ワードはひるまず

「ルイは！！ルイは俺たちのために犠牲になったんだ！！！！進む
しかないんだよ！！！」ワードも怒鳴った

「何で死んだって言えるんだよ！！！！分からないだろ！！！！」

「手榴弾を渡した・・・」「あれは身を守るために渡したが、もうひとつ理由もある」

「???なんだよもう一つの理由って?」

「安楽死だ」「奴らに殺されるくらいならと渡しておいた」「俺としては突破口として使ってほしかったが、今さっき爆発音が聞こえただろ」

「あれから、時間が経つてもルイはここに来ていない」「だから、死んだんだ・・・」

「アンタはこうなることが分かってて行かせたのか!!!」

「誰かが犠牲にならないと先には進めないんだ!!!!」「ウオードのこの怒りの口調はマービンではなく、むしろ自分に言っているように思えた」

それを感じ取ったマービンはこれ以上何も言わなかった

リサが「先に進みましょう」「彼の死を無駄にしたらいけない」と言った

「ああ、そうだな・・・」とウオードとマービンが言った

「さっきは熱くなってすまねえ」とマービン

「いや、頼りない俺が悪い・・・」とウオードがすぐに言い返した

こうしている内にもゾンビたちは着々と上の階に侵入して行っていた

6階・・・

ここも生存者なし

ついでに受付のカウンターの上にハンドガンが2丁あった

ここで身を守っていた人のだろう

ウオードはマービンからライターを借りて、わざとシャッターの前で物を燃やし

防犯システムを作動させシャッターを閉めて7階に向かった

500あまりある奴らを何分足止めできるか分からないが、ないよりはマシだろう

・・・

「ウオード、お前の判断はすばらしいな」「ハンターをプレゼントしてやるからおもちやにするといい・・・クククク、ハハハハ」

管理室はルイとかいう男のせいでシャッターが閉められなくなった

ハイドも機械には相当強いことから、驚いていた

監視モニターはきちんと働いているので、モニター越しからあるスイッチを押した

ハンターを2体投入した

「7階の侵入者を殺せ・・・」

バイオハザードChapter3（後書き）

作中で人型の化け物とかゾンビとか表現が異なっていますが

ウォード達は、もちろんゾンビという名前を知らない為人型の化け物と言っています

何か読み直して思ったんですけど、誤字脱字が意外にあったりします
出来るだけ修正をしたいと思いますが、前文などで理解していただ
けると思います（反省）

一方、ハイドはゾンビを知っているためゾンビと呼んでいます

バイオハザードAnother Chapter 2（前書き）

アナザーの第2です

時系列は小説に乗っている順番ではないので勘違いなさらないよう・

・

一応休日にワードが巻き込まれ

その2日前の出来事を、アナザーとして書いております

あいかわらず上から目線で読んで下さい
そっちの方が私としても気が楽です^^

バイオハザード Another Chapter 2

人喰い病に関係しているだろうと思われる病院の地下

もちろん一般人は地下があることなど知らない

一般人が知らない地下

恐らく今回の調査で一番危険であるからメンバーも4人にした

エドウィン（副隊長）マルコ（狙撃？2援後の？1）とテラ（医療？1）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）の4人で向かうことにした

・・・

地下の奥

「ハイド様、ハンターに人工知能をつけたタイプ2ですが戦闘力はどうやって計るのです？」

「クククク、今俺の優秀な部下がここを勘付いて向かってきている」

「だが、お前で計るとどうなるかな？」

「えっ、何をおっしゃるの・・・ギャあああああ」

「フン、やはり凡人ではこの様か」

ハンタータイプ2はハイドの側にいた研究員を鋭い爪でひっかいて殺した

「クククク、もう少しで完成するこのGウィルス」「Tウィルスという出来そこないとは違う」

「これを俺に投与し、人間を超え神になる」

「もう少しだ・・・」

ハイドは笑うのを止められなかった

・・・

4人の背後にはハンター忍び寄っていた

「ザシュ」という首が鈍く裂かれた音をエドウィン、マルコ、テラは聞いた

「レイラアア!!」

「お前ら構えるんだ」とエドウィンの合図とともに

銃弾の嵐が起きた

ハンターはしばらくじたばたしてすぐに動かなくなった

レイラは即死していた・・・

頸動脈を切られ、血がブワァーと流れ出ていた

「クソっ！何だこの化けもんは」とマルコ

「先に進んで調べる必要があるな、マルコ後ろの警戒をもっと強めるようにしろ」とエドウィンが言った

「了解」

しばらく進んでいると何かが近づいているのが確認できた

「二人とも前を見て」隊の中で唯一の女性テラが言った

ふらふらこっちに近づく人がいた

「やはり人がいたか・・・だが様子が変わだ、うかつに近づくなよ」とエドウィン

1メートル位まで近づくと人は急に足を速め、エドウィンに掴みかかった

「ぐっ・・・なん、だ・・・この力は」力の強いエドウィンが押し倒されかけている

「撃てっマルコ！」

「ズダダダダン」マシンガンを連射した

やはりこの地下はおかしい

人喰い病と関わっているのは、間違いなさそうだ

この先も何体かこういう奴らを始末し進んで行った

・
・
・

「さあ、完成だ・・・」

カプセルからGウィルスを取りだしたハイドは満足そうな顔をしている

プスッ

注射器タイプのGウィルスをハイドは腕から注入した

その時、研究員のゾンビがハイドの方へ向かって来ていた

「ククク、ここはうかつに休憩もできんな」

今までも何体が襲ってきたが、全て頭を撃ちぬき問題なく対処していた

「今回は銃を使わない」とハイドは言い

ハイキックを繰り出した

ゾンビの頭に命中し何十メートルも吹き飛んだ

「！！クククク、フハハハ投与してから１０分でこれか」「最高の気分だ」

「しかし、ゾンビでは私の力は試めせんなあ」「お前らよ」とハイドは振り返った

「ハイド、こんな所で何をしている！？」「テラが言った

「何をしているかは身をもって体験しろ」

ハイドは瞬時にエドウィンに近づいて蹴り飛ばした

体重の重いエドウィンがフワッと浮き、ゾンビのように何十メートルも飛んだ

ズザザザアーと地面を滑る

「ゴホっゴホっ・・・何だこの力は！人間か！？」

「神だ」

次にマルコとテラに向かった

マルコはマシンガンを構え撃とうとするが、弾き飛ばされ掌打をくらわされた

テラはそのまま首を掴まれ、手刀を向けられている

「ヒュン」テラの心臓を貫こうとした時、エドウィンがハイドにタ

ツクルした

「フン、貴様らの躊躇ないところ・・・」「俺が教えた教育はきちんと出来ているようだ」

「普通は仲間に銃は向けられないものだが・・・」とハイドはやはりゾンビ共でなくお前達でないと戦闘力は計れないと言いたげに笑った

「何をしているのかと聞いているハイド!」とエドウィン

「クククク、まあいい教えてやる」「この街を明後日壊滅させる、これはそのための力だ」

「そのカプセルに入っているのは、タイラント」

「Gウィルスという究極のウィルスを投与して出来た化け物だ」

「病院の人間や街の人間を何百人と犠牲にしてやっと出来た一体だ」

「その究極のウィルスを私に投与し神になった」

「世界中にウィルスを撒き、選ばれた人間だけの世界を作る」「その頂点が私だ」

「正気なの？アナタ・・・そんなバカなことは私たちがさせない!」

「クククク、強気だなテラ」「だが、そんな戯言は私を殺してから言え」

またハイドは消え、テラに近づいて掌打をくらわす

「うう・・・」壁に激突し、テラはうずくまった

恐らくはろっ骨をやられた

側にいたマルコには肘打ちを顎に

エドウィンには回し蹴りを当てる

「クククク、どうした？私を止めるんじゃないのか？」

懷からハイドはハンドガンを取りだし、マルコに向けた

「まあ、貴様らに生きてここから出られては困るから遊びはここま
でだ」

「バアン、バアン」

！！！！！！

ハイドの手からハンドガンが落とされた

「レックス、サム、ロイ！！！」テラが言った

エドウィンがハイドの元にたどり着く前、この三人増援を頼んでいた

「ナイスタイミングだ」とエドウィン

ポタポタハイドの手から血が流れる

「クククク、流石は特別警察のメンバー手際がいい」

そう言うとハイドはタイラントの入っているカプセルのスイッチを押した

「ブシュウウ、ガチャン」ゆっくりとタイラントが出てきた

「さて、ここからだぞ貴様ら・・・」

「ザクツ、ブシュ、ドスッ」「ズダダダアアン」銃声が鳴り響く

激しい戦闘は意外にもすぐに終わった

・
・
・
・

特別警察7人は壊滅

ウォードとラムに連絡が繋がらずここに来なかったのは不幸中の
幸いかもしれない・・・

バイオハザード Another Chapter 2（後書き）

ラムのチャプターも考えております

彼女とウォードが通信できないのは、ハイドによる仕業です

特別警察の10人は、それぞれの連絡先を知っていて

それにより連携をとられたくないハイドが通信をできないようにしました

いわゆるハッカーみたいなものでハイドはそれに長けているということになります

それはおいといて、感想や評価をよろしければ是非お願いします

作者パワーが上がります^^

バイオハザード R a m C h a p t e r (前書き)

ラムチャプターです

全ての時間と並行して他のキャラが動いているって感じでしょうか
時系列 アナザー、アナザー2、チャプター1+ラム、チャプター
2、チャプター3です

チャプター1とラムは並行しています

まあ、気軽に読んで下さい^^

バイオハザード Ram Chapter

ラムはおとといの特別警察の行方が知れなくなったのを気がかりにしていた

携帯からも警察関係の人と連絡が出来なくなっている・・・

通信は常にあけておけ、と学ぶ彼女らからしたら心配になるのも無理はない

休日である今日、ラムは人喰い病に備え射撃場に行っていた

25メートル離れた的をラムはベレッタ（ハンドガン）で狙っていた

ラムの愛銃だ

特別警察だけ所持している、ベレッタのグリップやフレームの色は通常のものとは異なる銃だ

さらに10人が10人でタイプの違うものを特注でき、ラムの場合

安定した命中をするためのカスタマイズが施されていた

近くから見ていたら、銃を構えるラムは美しかった

「バンバンバン」

全て25メートル離れた的に命中

その時

「すげえ、すげえー25メートル離れた的に3連続」「しかも全て90点以上かよ」

隣から声が聞こえてきた

「姉ちゃんすげえな」「何かやっているのか？」と隣の若い男が聞いてきた

「ありがとう」「まあね、訓練つてとこかしら」「少しうれしげにラムは答えた

「俺の名前はカイン、あんたは？」

「私はラム、どうしてここに？」

「どうもこれも最近人喰い病の噂があるじゃねーか」「それに備えてんの！」

「フフ、私も同じよ」

「ていうか、姉ちゃん何もんだ？あの射撃の腕は一般人じゃないことを吐露してるぜ」

「特別警察に所属しているの」

「……へえーあの警察のエリート軍団の一人なのか！そりあさらに驚いたよ」

「アナタは？」

「俺は元自衛隊だったけど、今は建築関係の仕事！」「自衛隊時代
けがして彼女を心配させてな、引退したんだ」とカイン

「てか姉ちゃんのベレッタ、カッコいいな！特注か？」

「ええ、私用に使いやすいよう改造してあるの」

「なるほどな・・・そうだ！最近の人喰い病」「あれはどうなっ
てんだ？」

「おととい捜査に向かったわ・・・だけど7人が行方不明なの・・・

」

「私達が向かった先に手掛かりがあまりなかったわ・・・」

「そうか・・・」とカインが行方不明で心配だろうのに掘り返して
悪いと思ったようなトーンで返事した

それから2人は事件の事やお互いの事をしばらく話していた

「ズル、ズル、ズル」背後からまるでスボンの裾をひきずっている
かのような音がした

2人は振り返り確認した

様子がおかしい

さっきの受付の男性

もともと受付の時から、体調がすぐれてなさそうだった

顔色は青く、病人みたいな状態だったのに異常な食欲で何かを食べ
ていたことを思い出した

「おい、姉ちゃん！これってまさか・・・」

「まだ、分からないわ」「止まりなさい!!」

ラムの呼びかけに全く応じず、男性はズルズルとうめき声を上げな
がら近づいてくる

1メートルの距離で突然カインに掴みかかって来た

「グワアアア」という声とともに口を開けて

危険だと判断したラムが男性の横腹に蹴りを入れた

ドチャと鈍く倒れ落ちた男性

「こいつ、俺を噛みつこうとしてきやがった」「人喰い病か!?!」

まだ向かってくる男性にカインは発砲した

「バンバン」

右ひざに2発命中

だが、それがどうしたと言わんばかりに男性は近づいてくる

「！？ハァーどういうことだ？なぜ動ける？？」

次に反対のひざを撃ったがまだ動いてくる

ラムが心臓を狙った

「バン」

普通の人間ならば即死する、人体の急所を撃ちぬいた

が、まだ動く

「人喰い病で確定ね・・・流石に驚いたわ」

頭部にラムとカインが1発ずつ撃ち込みようやく動かなくなった

「これ・・・街中の人間がなったらヤバイよな・・・」

「その悪い予感的中したわ、見て！」

ラムの携帯をニュースに通信した

カインの予想は見事的中していて、街の至る所に人喰い病と見られる症状の人間が多数いるというライブ中継がしていた

人間とは呼べない、人間の形をしている化け物といった方が適当か・
・

ライブ中継の人も早く非難すればいいものの、巻き込まれて死亡している

「カイン、今から警察署に行くけどどうする?」「ここにいたらいずれ巻き込まれるわよ」

「なら付いて行くよ」「姉ちゃん1人よりも、俺がいた方がいいだろ」

「まあね、ていうか嫌がっても連れて行くけどね」

「強引なこつて・・・」

今からここの射撃場から少しある、警察署に向かう

特別警察も所属している、もちろんだがラムの仕事場でもある

そこに行つて、警察官と武器を集め、人喰い病に対抗するという算段だ

車で20分、日は暮れかけていた

車に乗っている途中、何人かふらふらしている人間を見たが恐ろくは人喰い病の化け物だろう

「カイン、さっきから何をそわそわしているの?」

カインが少し落ち着かない様子を見てラムは聞いた

「いや、な・・・」「病院で働いている彼女が心配でさ・・・リサッ

て言っただけど」

「なら、先に病院に向かいましょう」

「すまないな、恩にきるよ」

この都市一番の病院に急ぎよ向かうことにした

日は暮れ、空が暗闇に包まれていった

病院の所で車を止め、入口から入ろうと思っていた

だが、入口に大量の化け物がいた

まるで、誰かを追いかけて来たかのように・・・

「これじゃ無理ね・・・やっぱり警察署に向かってヘリで屋上から向かいましょう」

「だな・・・悔しいけど死に行くようなもんだからな」

ラムは、カインが冷静で助かったと思った

彼女が心配だから、それでも行かせると言いだすかと案外思っていたが違って良かった

特別警察の中では操縦を得意としている者がいる

レックスというのだが、そのレックスのヘリを使って屋上に止めれば病院に行ける

特別警察は全てのメンバーがヘリを運転できる

ラムも例外ではなかった

警察署

街の安全を守るこの機関も、入る前からなんとなく頼りなく見えた
車から降りたラムとカインは正面玄関から警察署へ入って行った

・
・
・

「ラム・・・お前にはタイラントを用意してやるっ」

「ウオードは私が相手をしてやりたいからな・・・クククク」

「生きて病院の屋上に来れたなら相手をしてやってもいいがな・・・」

「

映像越しにハイドは静かに笑った

バイオハザードRam Chapter（後書き）

今更ですが、この話から読んでくれた人も、最初から読んでくれて
いる方も

両方ともありがとうございます

よろしければ是非感想を書いてください（評価も）

チャプター4はもう少しで掲載しますので、今しばらくお待ち下さ
いな^^

バイオハザードChapter 4（前書き）

久しぶりの投稿です

毎回安定して何十人の方に読んでもらえるにはどうしたらいいんでしょうかね？

まず、検索かけても出てこないこの話をどうやって皆さんは読んでいるのか？

という疑問が生じました^^

バイオハザードChapter 4

7階に向かった、ウード、マービン、リサ・・・

ここに来るまでに1人を犠牲にした

警察である、しかも特別警察であるウードはかなりの責任感を感じていた

ただ、前向きに落ち込んでいて「もういいや」とか「俺には何もできない」とか考えず

「次はこの二人を絶対に死なせない」とポジティブに考えていた

その時「ガシャアン」という激しい音がした

「何の音!？」リサは動揺を隠せない

「俺が見てくる」「二人はナースステーションの中で隠れていてくれ」

どの階でもそうだが階段を上がってすぐに、受付があるナースステーションがある

そのカウンターの中に、マービンとリサは身を潜めた

それが罠だと知らずに・・・

・
・
・

「ククク、やはりウォード」「お前はその2人の為に身を挺して探索をしたか・・・」

「それが畏だな・・・」

ハイドはハンターを1体だけ奥へ待機させ、大きな物音でウォードをおびき寄せた

もう1体をウォードがいない間に、ナースステーションに送りこんだ

悲鳴を聞こうが、ウォードが1体のハンターと戦っていれば

そう簡単に救助に向かうことはできない

ハイドは静かに笑っていた

「お前くらいは生きてここに来いよ・・・ウォード」「後は死んでかまわん」

・
・
・

「ここにも生存者なし・・・もう生き残りはいないかもしれんな」とウォードはつぶやいた

人型の化け物は数体いたが、距離をとって落ち着いて対処すれば大丈夫だった

大体、こんな奴らにいちいちびっくりしては守れるものも守れない

物音の原因はまだ発見していない

新手の化け物かもしれない、そうワードは思い警戒を強めた

やはり生存者はいないか、と最後の奥にある病室から出た時だった

目の前に、見たこともない化け物がいた

緑色の皮膚に爪をもつ、両生類のような化け物・・・

「お前が、物音の原因だったか・・・」妙に冷静な自分にワードは驚いた

落ち着いて、ハンドガンを構える

狙いを定め引き金を引こうとした瞬間、化け物は飛びかかって爪を振ってきた

「！！！！速い」ほぼ反射神経でよけたワード

的確に首を狙ってきた化け物、当れば即死だ

「バンバンバン」3発頭部に撃ちこんだ

が、少しぐらっただけで倒れなかった

「ちっ、やはり奴らよりはしぶといか」と呟いた時だった

「きゃあああああ」とリサの悲鳴が聞こえてきた

「リサ！？何が起きた！！？」

少しの隙をハンターは逃さずワードに飛びかかった

ワードを爪は避けたものの、そのままのしかかられた

「グッ・・・なんて力だ」

片方の手でワードの胴体を押さえつけ、もう片方を振り上げそのまま下ろそうとしている

「こ、いつ・・・」押さえつけられた手が振り払えず焦りを感じていた

リサとマービンも心配だが、そんなこと、いや、そんなこととは言っ
つてはいけないが

そんなことを考えている余裕はない

正確に首を貫こうとしている手は、狙いが定まろうとしている

しかも、両腕を押さえつけられていて銃が使えない

「オラァァァァー」と叫んだワードは渾身の蹴りを繰り出した

だが、ハンターは吹き飛ばず、少し持ち上がったただけだった

しかし、振り下ろされた爪はウオードの首から10センチのところで止まった

ウオードはそのまま体を回転させ、ハンターを振り落とした

転倒したハンターをハンドガンで頭を撃ちぬいた

「バンバンバン」

ハンターはやつと動かなくなった

「ハアハア、二人は無事か!？」ウオードは二人の元へ向かった

・
・
・

ウオードがハンターを倒す少し前、リサとマービンの前にハンターが現れた

「なんだこの化けもんは!？」とマービンが言った

「何よ、この化け物・・・」リサは口に手をやって驚いていた

ハンターは低い声で鳴き、マービンに飛びかかった

「ザクッ」

マービンの肩を思い切り抉った

「きゃあああああ」「マービン！！！」リサは絶叫する

かるうじて首への命中は免れたが、肩を挟られ血が出てきている

「くそつ次から次へと忙しいもんだぜ」マービンは片手でハンドガンを発砲した

「バンバンバン」「バンバンバン」「カチャ、カチャ」・・・

・・・弾切れだ

ウォードもまさかこの中央のナースステーションにこんな化け物が出てくるとは思ってもいないので2つあるうちの1つのマガジンを渡していない

人型の化け物なら6発もあれば1、2体くらい身を守れると思ったからだ

「万事休すか・・・ってカリサ？」「おい、リサ！どこへ行った？リサー」

ついさっきまでいたリサがない

ハンターはマービンとの距離を縮めていった

「くそつ、ここまでか・・・家族に会いたかったな・・・」

ハンターは観念したか！と言わんばかりに低く鳴き、爪を振りかぶ

った

「ズドドドドドドドドド」強烈な銃声がした

マービンは構えていた両手の隙間からつぶっていた目をゆっくり開けた

「リサ！！アンタが助けてくれたのか！」

リサは逃げていたわけではなかった

どこかに武器はないかとナースステーション内を探していた

結果30秒という短い時間でマシンガンを見つけた

彼女の幸運にマービンは救われた

その時ウォードも合流した

「二人とも無事だったか！マービン！！」「くそっ間に合わなかったか」

「生きているぜ」「だから間に会ってるよウォード」とマービン

10分間、休憩をしマービンはリサに包帯を巻いてもらった

命に別状はないみたいだ

ウォードはこう推測した

10階で監視している奴は、頭の切れる奴でしかも

さっきのような化け物を操れる・・・

あのタイミングで化け物が2体現れば、自然に出てきたという線は消える

つまり、人喰い病に関わる重要なやつに違いないと考え

「捕まえて聞き出す」と言いウードは

「8階に行こう、もう少しでヘリも到着するころだ」とリサとマービンに言った

現時点で感染するということを知らない彼らは

感染した、否、感染してしまったマービン連れ8階へ上った

奴らから攻撃され、傷口からTウィルスが入ると奴らと同じになることを知るのもう少し後だ

・・・

「クククク、ウードはやはり倒したか・・・いや、それよりも一般人2人が生き残ったのは意外だったな」

ハイドは、残念そうかつうれしそうかどちらか分からない表情をしていた

・
・
・

8階

もう生存者はいんじゃないかという先入観のせいで探索する気が失せかけていたウォードだが

警察である自分がそんなこと思っていてはいけないと心にムチをうつた

またマービンとリサをナースステーションに待機させるのは危険だと思ったが

連れて行っても、マービンの状態が状態だけに連れていくのはもっと危険だと思った

マシンガンがある、それと二人を信じて8階の探索に向かった

まずは左側

下の階でもそうだったが、数体の化け物がいて様々な殺され方の死体がいくつもあった

「こいつも、噛みつかれて死んでいるな・・・」

「こいつは、貫かれた痕だ・・・」

「ううう」といううめき声でウォードは振り返った

人型の化け物が一体ゆらゆらと近づいてくる

「またか・・・」

「カチャ、バン・・・」薬莢が一発でて、銃口から煙があがる

脳天をぶち抜くことによって一撃で倒せると気付いたワードが狙わない手はない

さつきから、銃弾によって殺された人間の死体がちらほらみえる・

・

「10階の奴のしわざか？・・・」

そう思いながら左側の探索を終えた

次は右側

ハンドガンの弾はマガジンを含め30発

9階、10階の分を考えると無駄には出来ない

出来れば、舌の長い奴や緑の両生類とは戦いたくない

部屋に入ると奴らがいた

「3体・・・しかも死体に喰らいついているな」

こんな数を相手にしては弾がもったいないと思い振り返ろうとすると

奴がいた

「チッ、どこから現れるんだよ」ウオードは銃を構えた

しかし、後ろの3体にも気付かれてしまった

「バンバンバンバン」1、2、3、4体全て撃破！

その腕前は流石特別警察射撃？1と言わざる得ない

わずかに位置がズレたら、頭部でも一撃では死なない

頭部の中でもさらに弱点の部分をたったの一撃で撃ちぬく彼の腕前は称賛に値する

その直後、ウオードは驚かされる

さっきまで3体に喰われていた死体が動き出した

「何！？死んでいたハズだが・・・」

「バン」その直後「バタッ」とゾンビが倒れる

「・・・奴らに喰われると・・・いや、奴らの成分か何かが入ると奴らのようになるのか？」

「！だしたらマービンは！！・・・」「マズい早く戻らないと2人が！」

急いでナースステーションに戻った

「ハア、無事か・・・」と安堵のため息をついたウォード

「ウォード、さっきからマービンの顔色が悪いの」「それもどどんひどくなっている」

「ハアハア、ヤベエんだウォード」「お前らが美味そうに見える・・・喰いつきたくて仕方がねえ」

「マービンしつかりしろ!!」

「駄目だ・・・腹減った・・・人間の肉がほ、し、い」「マービンは言葉をろくにしゃべれていない

「うづうう」「奴らと同じようにマービンが襲いかかって来る

「クソっ！離れろリサ」ハンドガンを構えるウォード

「バン」

マービンは動かなくなった

10階の奴に激しい怒りを覚えた

「化け物を送らなければこんなことには・・・絶対に捕まえる!!」

ウォードは壁を思い切り殴った

そして、9階へと向かって行った

・・・2人犠牲にした、警察のウォードは市民を守れない悔しさと怒りで溢れていた

バイオハザードChapter 4（後書き）

ありがとうございました

誤字脱字がありましたら言って下さい

バイオハザード R a m C h a p t e r 2 (前書き)

ラムチャプター2です

ラムチャプター1に比べ長いですが、よろしくお願いします^^

バイオハザード Ram Chapter 2

警察署

街の安全を守り、犯罪者を捉える、市民からしたら頼もしい組織だ

だが、その警察署は今はとても頼りなく見えた

正面玄関から、ラムとカインは入って行った

「！！！！あれは！？」ラムが真つ先に反応した

少し奥で、警察官が倒れている

「大丈夫！？他の皆は？」

「ううゝ、アンタはラムか・・・ここも危険だ・・・早く逃・・・」

これ以上警官はしゃべらなかつた

「まだ生存者がいるかもしれねーから探そうぜ」とカイン

「そうね！諦めずに探しましょう」

「俺は中の構造知らないから頼んだぜ」

まずは、特別警察の部屋に向かった

途中化け物になった警察官がいくらかか襲ってきたが問題なかった

「やっぱり皆いないわね・・・」メンバーがもしかしたら仕事場の部屋にいるかと思ったが違った

武器をしまっているロッカーから、ショットガンと弾薬、マシンガンと弾薬を入手しておいた

「防弾ベストもしておかないとね」

「へっ！こんだけ武器があつたら十分だけどな！」

「油断しないことよ」

この警察署の仕組みは地下1階、地上1～3階という構造になっている

地下には牢獄がある

「地下に牢獄があるわ」「そこならまだ生存者がいるかもしれない」

「いいのか？犯罪者じゃないのか？」

「そうだけど・・・ほっとけないでしょ！？」

1階は1通り捜し終えたので、地下に向かった

だが・・・

牢が全て開いている

血まみれで・・・

「誰が・・・？」いくら人型の化け物でもここまで出来るわけがない
現に今までの警察官の化け物も、ここまで損傷していなかったからだ
「おいおい・・・あれを見ろよ」カインが声のトーンを落として言う
原因が判明した

警察犬

捜査と一緒に連れていく警察犬

それが化け物になっている

納得がいった

あの発達した牙はこれらの死体をこっという形にするのに適している

「6匹・・・マズいわね」

「まだ刺激していないからか知らんが動きが鈍い」「せーので牢屋に
逃げるぞ」

「せーの！！！！」

ボタン！！

カインとラムは急いで牢屋を閉めた

その瞬間、牙をむき出しに化け物犬が向かって来た

あまりにも猛スピードで突撃してきて牢屋が壊れるかと思った

いや、壊れそうだ

「おい、姉ちゃん、この牢屋壊れるぞ・・・」

「・・・みたいね」と若干のんきに答えた

「まあいい、反撃だ！」

カインはショットガンで化け物犬を撃っていった

ラムがマシンガンを構えた時だった

「！！」何かに脚を掴まれた

化け物！こういうときに生き返った

「力、強いわね！」

「ラム！！」カインはいつも姉ちゃんと呼んでいたが今は違った

ラムは噛みつかれないようにするので精一杯だった

振りほどけない

ブーツを履いているから簡単には噛みつかれないが、油断は禁物

「くそっ弾切れた」カインはラムの様子に気づいたと同時に弾を切らした

このままじゃ檻が破られる

と思った時

ヒタ、ヒタ、ヒタという音がした

「!!!!!!何よコイツ」

天井の換気扇から舌の長い化け物が出てきた

「シュッ」

カインの首に巻き付いた

「カイン!!!!」

見ていて物凄い力で撒きつかれているのが分かる

2・5メートルの高さにいる化け物は口を開けて持ち上がったカインを食そうとしているのか

ゆっくりカインが持ち上がっていく

「グ・・・クッ」

選択は3つ

カインを助ける、化け物犬を倒す、脚を掴んでいる化け物を倒す

カインを助けるが優先順位なのだが、檻が今にも壊れそうだ

だからといって化け物犬を撃つていてはカインが助からない

だが、自分の脚も噛みつかれるとマズい

恐らく、噛みつかれると自分も化け物になる

それは今までの警察官の傷からしてそうだ

!!!

手に持っているマシンガンを上に掲げた

ラムはとっさにカインの脚からハンドガンを抜き取った

ハンドガンの2丁銃

一見マシンガンの方が強そうだが

2丁なら2つ同時に行動可能だ

カチャ、カチャ

脚の化け物と天井の化け物に向ける

バンバンバンバンバン

空になるまで撃ち続ける

脚の化け物も天井の化け物も動かなくなった

フワッとマシンガンが落下する

とその時、2匹の犬の化け物が檻を破る

ラムはスライディングキャッチでマシンガンをとる

「終わりよ!!」

ズダダダダダダン

一網打尽にした

犬の化け物も殲滅した

カインがショットガンで頭数を減らしてくれなかったらヤバかった
がなんとかなった

ドサッとカインが落ちた

「ハアハア、ゲホゲホ」

「大丈夫？」

「ああ、助かった」「ていうか今の行動映画でしか見たことない・・

・ゲホッ
」

ラムの手を借りカインが立ちあがった

地下も1通り搜したが生存者はいなかった

そのまま2階まで進んだ

2階の生存者を搜している時だった

「ピピピッ
」

ラムの通信機が光った

「ラム！！良かったやつと繋がった」

「ウオード！？無事なの？今どこにいるの？」

「病院だ」

「病院・・・！」カインが反応する

「もう知っていると思うが、24時に爆弾が投下される」

「おいおいマジかよ・・・」ラムより先にカインが驚く

携帯のニュースを見る余裕がなかったから分からなかった

「もう少しで屋上につく、そこでヘリを要求して脱出するつもりだ」
「ラムはどうする？」

「私もヘリで脱出するわ」「その前にカインと病院に行くから合流できない？」

「分かった！生きて来いよ」

「ええ！またあとで」

ブツンと通信を切った

「リサは無事なのか？・・・」カインは呟いた

2階、生存者こそいなかったがかわりに不自然な傷を見つけた

人型の化け物、化け物犬とは違う傷

まるで鋭い爪に切り裂かれたような傷

「嫌な予感がするわ・・・早く進みましょう」

「だな・・・第三者の化けもんがいるみたいだ」

そう・・・予感的中する

3階

奥には外に出るドアがあり、そこにヘリが3機ある

3階の生存者を捜して脱出できる

驚いたことに、この階には化け物がいなかった

代わりに生存者が2人いた

ジョンとロゼッタ、新米警官だ

恐怖で今まで3階の物置に隠れていたらしい

とにかく生存者が見つかったと、これでへりの所へ向かった

ヒュオつと風が入り込み外へ出る

3階からは、ある程度街が見渡せるが酷いものだった

あちこちで叫び声、化け物共がウヨウヨいた

ラムはへりの所に向かいエンジンをつけようとした時だった

バコン！！！！と勢いよくドアが吹き飛んだ

！！！！！！

「コイツが・・・」ラムは呟いた

「ヒィィィ」と2人の新米警官

「こんな奴を相手にすんのか・・・」カインは驚いていた

タイラント

こいつはもちろんハイドの刺客なのだがラムは知らない

特別警察を壊滅させた化け物

「ドシュ」

ロゼッタはタイラントの鋭い爪で首を引き裂かれた

ジョンの体に血が飛び散る

「あああああゝゝ」とジョンは精神崩壊寸前だった

そんな弱い人間はいらないとばかりにタイラントはジョンも引き裂く

「ドシュ」

「あの爪・・・あたるとマズイな」

「油断しちゃだめよカイン」

「カチャ」2人はマシンガンとショットガンを構える

ダツとタイラントが距離を詰めようと駆け出した

「！！！！速い！想像以上だ」カインは次に爪をなぎ払うだろうと予測して横に転がった

案の定タイラントは爪をなぎ払う

なぎ払った時の風でカインの髪が揺れる

ズドン、カチャ、ズドン、カチャ、ショットガン2発を顔面に

ズダダダダダン、背中にラムのマシニング

「効いてないのか！？顔だぞ！！？」まるで堪えてないタイラントに2人は驚く

通常ショットガンを数メートルの距離で（あまり離れてはダメだが）撃ちこむと人型の化け物はおろか、犬の化け物でも頭部が吹き飛ぶ

それは今までで良く分かっていた

しかし、目の前にいるコイツはそれがどうしたと言わんばかりにビクともしていない

諦めず、ショットガンをカインが撃ちこもつとした時

左手の鋭い爪攻撃が命中した

「グフツ・・・」ズザザザと地面を滑る

腹部に当たった爪は次は防弾ベストごと破壊するだろうことを物語る

「あー効いたわ・・・なんて威力だゴホッゴホッ」

恐らく左利きであろう化け物、左手を使った攻撃のスピードは尋常じゃない

ズダダダダダン、ラムは背中にまだ撃ちこむ

標的がラムに変わった

8〜10メートル離れた距離からタイラントが攻撃の動作にはしる

ダンとジャンプして距離を詰める

「ツツ!!」

ブンツと必殺の左手

これはかるうじてしゃがんだ

だが、左手と比べあまり発達していない右手、それで襟を掴まれた

そのまま、力任せに投げつけられた

ラムは壁に激突

目を開けた時には左手が振り下ろされようとしていた

「調子に乗るなアア」カインが叫びタイラントにタックルした

グラつくタイラントをラムは見逃さない

狙いを定めている暇はなかったので闇雲にマシンガン

ズダダダダダン

よろよるとタイラントはしていた

「ねえカイン、弱点はもしかしたらむき出しの心臓じゃない!？」

「かもな! 試す価値はある」

「援護頼むぞラム!!」

「任せて!!」

カインがタイラントに突撃!

タイラントは爪を振り下ろす

だが、ラムのマシガンに阻まれる

ガチャ、ズドン

ショットガンが心臓に1発

ガチャ、ズドン

もう1発

タイラントは叫んでいた

「ラム! 一緒にありったけ撃つぞ」

「ええ!!」

銃弾の嵐が心臓に鉛の弾を埋め込んでいく

心臓を抑えたタイラントは苦しそうに倒れていった

「やったな！」

「そうね！病院に行きましょう」

ラムはへりのエンジンをつけへりを飛ばした

生存者を見つけたが助けられなかった

悔しい思いと、誰がこんな事件を起こしたのかと怒りの思いでいっぱいだった

・
・
・
・

ムクリ

タイラントはゆっくりと起き上がった

バイオハザードR a m C h a p t e r 2 (後書き)

読んで下さりありがとうございます

感想、評価ぜひお願いします^^

バイオハザードFinal Chapter（前書き）

いよいよ最後のお話です

アナザーはアナザー

ラムはラム

本編は本編で呼んだ方が話の内容を覚えていやすいかもしれません

それではどうぞ^^

バイオハザードFinal Chapter

9階

ついにここまで来た

10階にはこの事件に関わっている者がいる

「ん？通信機が使えるようになってる」

今まで使えなかった通信機が使えるようになっていた

すぐさまラムに連絡した

ピーピーピー

カチャ

「ラム！！良かったやつと繋がった」

「ウオード！？無事なの？今どこにいるの？」

「病院だ」

「もう知っていると思うが、24時に爆弾が投下される」

「もう少しで屋上につく、そこでヘリを要求して脱出するつもりだ」
「ラムはどうする？」

「私もヘリで脱出するわ」「その前にカインと病院に行くから合流できない？」

「分かった！生きて来いよ」

「ええ！またあとで」

ピッ

「カイン、他の生き残りもいるのか！良かった」

ピーピーピー

「またか！？誰だ？」

カチャ

「お前が読んだヘリはもう来ない・・・追撃したからな」

ガチャリ

声が変わっていて人物が特定できなかった

ウオードはヘリを救助に呼んでいた

恐らくそれが何らかの方法で来なくなったのだろっ

十中八九10階の奴の仕業だ

「どこまで人を馬鹿にしたらいんだ!!」

ウオードはさらに怒った

9階を1通り調べたが、死体や化け物、両方いなかった
というよりは無人といった方が適切だった

「くそっ生存者なしか・・・」

「次は10階よ、気を引き締めて行きましょう」とリサ

「ああ、アンタだけは死んでも守るよ」

コンコンコン、慎重に階段を上がって行った

10階

誰もいない

ここに事件に関わっている奴がいるハズだ

「よく来たな・・・」

「!!!!この声」ウオードはどこからしたのか分からない声に警戒した

「ウオード、流石だ」「貴様はやはり見込んでいただけはある」

「ハイド!!!!!!どうしてお前がここにいる!!!?」

「クククク貴様の働きは大したものだった・・・」

「最近警察署も行かずに何をしていた!?」ウオードの口調が荒い
「何をしていたのかは身をもって体験しろ!!他のメンバーのよう
にな」

「お前がツツ!!メンバーを殺したのかツツ!!!!」

怒りの頂点と言った方が適切か

ウオードは自分でも分からないくらい怒っていた

「正確には俺ともう1つの兵器で・・・今頃ラムが戦っている
じゃないか?」

ウオードの怒りは限界だった

カチャ、バンバンバン

容赦のないハンドガン

だが

!!!!

「全て避けるだど!?あり得るのか・・・」

「ああ、神だからな」

ハンドガンの弾をウオードが引き金を引く瞬間を狙い避けるハイド
常人には到底不可能！

「リサア！！マシンガンだ！！こいつだけは許さない」

「クククク、そこまでとり乱した貴様は初めて見るな」

フォンと流れるようにウオードに近づきハイドは掌打

フワッ

ウオードは吹き飛んだ

「！！？？」

壁に激突

「グフっつなんだこの力は！？」

「クククク、神の力だ」「他のメンバーよりは楽しませてくれよ」

カチャ、バンバンバン

ウオードは起き上がりハンドガンを撃つ

シュツシュツシュツ

全て避けられる

物理法則など完全無視をしているかのような

銃弾を避けるなど、1発目がかろうじて出来てもこの距離で何度も出来るわけがない

しかも、弾切れだ

「その程度か!？」

ハイドはウオードの腹部を蹴り、首を掴む

逆の手は手刀で突き刺すように

「さあ、ここからどうする?」

ズダダダダン

「グッ・・・」

リサが背後からマシンガンを撃った

ハイドの背中に命中した

「貴様・・・」

いくら銃弾を避けられるといっても背後からは無理だと、それが分かるだけで十分だ

このチャンスをウオードは逃さない

ハイドの顔面をありったけ殴る

バキッ、バキッ、ゴキッ

パン、ハイドがウオードの拳を掴む

「図に乗るなよ・・・」

くるとウオードの手首を返し蹴り飛ばす

「クククク、ここまで生き残った女だけある」「背後からマシンガンを撃つとはな」

「お前から殺すよ女」

ズダダン、ズダダン

リサはマシンガンを正面から撃つが、やはり正面からでは当たらない

カチャ、ハイドはハンドガンを懷から抜き取り構える

「ハイドオオ！！」ウオードはリサを死なせたくない一心でハイドに抱えついた

「！！！！クッ邪魔をしゃがって」

「リサ！撃て！！俺に当たっても構わん！！！！」

ここで何の抵抗もなくリサがマシンガンを撃ったのは冷徹だからで

はない

むしろ、ここまで来るのに犠牲になった2人や被害者、ウオードの覚悟を感じ取って

ありったけのマシニングをハイドに撃ちこんだ

ズダダダダダダダン

羽交い絞めした時、腕にいくらかマシニングが当たったがウオードは痛みを感じていなかった

激しい怒りを感じていたウオードに「痛み」という生ぬるいものは効いていなかった

流石に何発も撃たれたハイドはフラフラしている

「クツ、・・・貴様ら・・・」

ハイドもここまで追い込まれるとは思っていなかった

手刀をウオードに向ける

「死ねエエ」

ドスッ

あまりにも速すぎる手刀にウオードは避けることが出来なかった

ポタタタ「グッ、、はっ」口から血がこぼれる

腹部に突き刺さった手

だが、ウォードはハイドに拳を放った

バキヤ、バキ、ボコッ

何発も何発も

「図に乗るなあああ」殴られながらもハイドはそう叫び

もう片方の手もウォードに向けた

そして

ドスッ

「!?!」ハイドは驚く

ウォードは手刀を左手で受け止めていた

貫通するという形で

しかし、手に貫通しているが首を突き刺されるのを回避した

「ハイドお前の好きにはさせん!!」

特注のウォード専用ハンドガンを右手に持ち思い切り殴りつけた

ガッソッ

ハイドの頭から血が流れる

それと同時にお互いが離れる

ズボッ

ハイドの手がウオードの体から抜けた

「ハアハアハア」お互いの息の切れ方は体力ではなく怒りによるものだった

ウオードの腹部からはドクドクと血が流れ出る

「ゴプッ・・・、ハアハア」口から苦しそうに吐血する

「苦しいか！？ウオード、その苦痛から解放してやる」「死という名のな！」、といちいち言わなくても分かった

ここで気づく

リサがない

「こんな時にどこに・・・」

「心配するな、逃げただけだ」「すぐに見つけて貴様と同じ所におくってやる」

その時だった

エレベーターのドアが勝手に開いた

と同時にボタン

管理室のドアが開き

「ウオード！そいつをそこに押し込んで！！」リサが言った

どうやらエレベータを開くようにしたのはリサだ

ズダダダダン

リサが残りの弾を撃ち込む

これ以上マシンガンに当ってはマズいと判断したハイドは弾を避けた

その直後、背後からウオードがもう1発銃で頭を殴る

ガッン

「グッツ、貴様アア」

やっと出来た隙をウオードは逃さない

エレベーターにハイドを投げ入れる

「なんのつも・・・」

エレベーターのドアが勝手に閉まった

ウィインという音でエレベーターは下に降りた

「1階に送りこんでやったわ、しかももう戻れないようにエレベーターの電源を切る」

と言ったりサはもう1度管理室に入ってエレベーターの電源を切った

「アイツらの餌になりなさい!!」

管理室から出たりサはすぐにウオードに駆け寄った

「大丈夫!? 歩けそう?」

「いや、手を貸してほしい」とボロボロになったウオードは言った

そして、そのまま屋上に向かった

数分ほどすると、ヘリがやって来た

「ウオード!!! 大丈夫?」ラムが駆け寄る

「ああ、何とかな・・・」

「リサ!! 無事か?」カインはリサに駆け寄る

「カイン!!」リサはカインに抱きついた

「爆弾投下まで30分、セーフね」とラムが言った

こうして皆ヘリに乗り込んだ

残念だが、もう他の生存者を捜している余裕はなかった

あと15分で爆弾が投下され、街がなくなる

活気あふれた街は一晩で崩壊しようとしている

こんなウイルスを私欲に使ったがために

・
・
・

へりに乗りながらウォードは思っていた

この長い夢は、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか

普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚

気を抜くことすらできない

大切な人は死に、街は一晩で壊滅

人間の形をした化け物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる

「生き残る」

その言葉は何よりも重い気がしたのだ

俺の中での一生のトラウマであり続けるだろう……

・
・
・

エレベーターのドアが開き1階に無理矢理着いたハイド

目の前にはゾンビの群れがいた

一斉にこちらに向かってくる絵はまさに地獄絵図

「クククク許さんぞ貴様ら、必ず殺してやる」

END・・・

ピーピー・・・

Next

Seven Survivor

7人の生存者が確認されました

バイオハザードFinal Chapter(後書き)

実はまだ終わりじゃないんです

ウオード達意外にも生存者がいたんです

名付けて7人の生存者

いずれ載せます

感想・評価お待ちしております

バイオハザードEnemy Report (前書き)

今回登場した化け物の特徴を書いたものです

ゲームとかと若干違うので大目に見て下さい^^

というか完全にオマケに近いので「へー」とか「ふーん」とか「あつそ」みたいなリアクションで結構です(笑)

バイオハザードEnemy Report

ゾンビ

特徴・・・人間がTウイルスによって凶暴化し、知能が著しく低下する代わりに力が強くなる

食欲は人間の数十倍で新陳代謝が活発になるため常にエネルギー（人肉）が必要となり

一定量のエネルギーを得ることが出来なかったゾンビは、うつ伏せゾンビとなり獲物が近くに通るのをじっと待つ

逆にエネルギーを一定量取り続けたゾンビは進化しリッカーとなる

なお、人間の傷口からTウイルスが入り込むと感染してゾンビとなる

個人差があるので数時間から数日でゾンビとなるが、極稀にTウイルスに抵抗力を備える人間がいて

理性を保ったまま、強靱な力だけを得るものもいるらしい

ちなみにハイドはGウイルスをコントロールしようとしたが、まだまだ扱い切れていないため

ウォード達に油断した結果、敗北する

対処法・・・距離を保ちながら攻撃するのが良い

鈍器などで頭部を潰すことによって即死させるのも手

いずれにせよ、ゾンビから外傷をもらうと感染するので近寄らずに倒すのが良い

動きが鈍いので逃げるのが一番良いかもしれない

ケルベロス

特徴・・・ 主に警察犬がTウイルスに感染して知能を残したまま、食欲が増加したゾンビ犬

警察犬、ドーベルマンであるため身体能力が高く、集団で襲いかかって来るので注意が必要

対処法・・・ 足で逃げるのは困難で集団で襲われると銃を持っていても押し切られる場合がある

頭部を正確に撃ちぬく技術がないと集団から生き残るのは難しいだろう

リッカー

特徴・・・ ゾンビがエネルギーをとり続けて突然変異したもの

耐久、動きが素早くなったものの目が退化して見えない

伸縮自在な舌は鉄のような鋭さをもっており、人間を容易に突き刺すことが可能

爪も油断できず、飛びかかりしてから爪の攻撃は人間の肉を容易に抉る

対処法・・・ 物音を立てずに逃げることをおススメする

ゾンビよりも耐久に優れており、1体倒せても銃声で他のリッカーを呼び寄せるハメになる場合も

あるので、やはり落ち着いて逃げるのが良い

ウォードは目が見えないことにすぐ気づき、戦わず撤退したところを見ると

やはり戦闘のプロだということがうかがえる

ハンター

特徴・・・両生類をベースにTウイルスで実験したTの中では完成に近いもの

タイプ1とタイプ2があるが、今回は知能向上したタイプ2が登場する

タイプ1はやや知能が足りなかったため手なずける圧倒的実力者以

外は従わなかったが

人工知能付きのタイプ2はある程度の命令は聞けるように改造されたタイプ3は猛毒をもったハ虫類などをベースに知能はそのままという恐ろしい実験も考えられていた

対処法・・・ハンドガンでは力不足

ショットガン、マシンガン、出来ればマグナムのような強力な武器で頭部を狙う必要がある

素早いので、ゾンビのように余裕を持ってなどと考えていると首を持って行かれる

タイラント

特徴・・・Ｔウイルスでは知能の低下などが見られ、いずれビジネスのことを考えるとＴウイルスでは

商売にならない、つまり出来そこないのＴでは満足できなかったハイドは研究員と共に新たなウイルスを

開発していた

しかし、どうやってもいい方法が出来ず悩んでいた時であった

病人を連れ去りいつものように実験をしていた時である

Tウイルスに抵抗を持つものが現れた

完全ではないけれど、強靱な力を持ちつつ、知能はあまり低下していない状態

その人間を実験をし、Gウイルスを生み出すことに成功した

だが、肝心なことを忘れていた

Gに耐える人間がいなかった

何人も、否、何千人も犠牲にした結果1体だけ生み出すことに成功

その結果、9mm弾などびくともしない究極の兵器が完成した

知能もハンターより高く、耐久力も破壊力も申し分ない

しかし、ハイドはこれで満足せず見た目もあまり損傷しない、人間と大差ないようにする

実験を街を壊滅させてから考えていたが、ウォードに敗れ叶わなくなった

対処法・・・むき出しの皮膚には硫酸が弱点である

グレネードランチャーの硫酸弾で、ある程度対抗できるようだ

ロケットランチャーで一網打尽にするのが一番良いかもしれない

ともかく、半端な武器ではこちらがやられるだけなので

出会ってしまったものは大抵が諦め、人生を終える

スーパータイラント

特徴・・・ タイラントが生命の危機を感じた時に突然パワーアップするらしい

本編ではまだ登場していない

対処法・・・ ?????

クロウ

特徴・・・ カラスがゾンビなどを突いて食べたために感染した化け物

知能はあまり低下しておらず、集団で人間を襲うという凶暴性が高まっている

本編では登場していないが、たくさんの人間が被害にあっているだろう

対処法・・・ 普通のカラスと違い爆竹、銃声にも物怖じなくなっている

飛んでいるため、銃で狙うのが困難

したがって逃げるのがよい、もちろん外傷を負わないように

バイオハザードEnemy Report（後書き）

次は登場人物の特徴を書きたいと思います

いつになるのかは未定ですね

なにせ今思いつきましたから（笑）

バイオハザードSeven Survivor1(前書き)

7人の生存者の話

それぞれがどうやって生き残ったのか

完全に本編ではないんですけどよろしくです^^

バイオハザードSeven Survivor1

ウォード、ラム、リサ、カインは街から脱出した

実際ハイドを倒してボロボロになった彼らに他の生存者を捜す余裕はなかった・・・

あちこちの骨は折れ、弾薬も尽きた

流石に特別警察といえど人間、人間に過ぎなかった・・・

だが、他にも生存者がいたことは彼らは知らない

・・・

「ハァー・・・どうしてこうなったんだ!？」「だからこの街はやなんだよ」

自宅のテレビを見ながら男はため息をついた

男の名はアンディ

ソファアーに寝転びながら、テレビのニュースを見ている

政府はこの街に核を撃ち込む気だ

ここには木端微塵!

「ちつ、車今修理に出してないんだよね」 「カーショップからパ
クるか・・・」

アンディはセリフを聞く限りチンピラのように思えるが、真面目に
働いている高収入の男性だ

冷静な判断で上まで登り詰めたその頭脳は、車が必要、武器が必要
だとすぐに判断した

「家にはベレッタしかないな・・・こりゃガンショップの行かんと
な」

ジャケットの下には防弾チョッキ、サイフ、ハンドガンをそれぞれ
装備して玄関を出た

24時に爆弾を投下するらしい

まだ4時間はあるから、時間はいいが外の様子が気になった

ガチャリ

家から出ても周りには誰もいない

「この辺に奴らはいない、か・・・」 「好都合さつさとガンショッ
プだ」

「ガンショップ・イエローシャンパン」

このあたりで有名なガンショップと言えばイエローシャンパンだ

豊富な品ぞろえに、詳しい説明をしてくれる店長が評判だ

店長は凄腕の軍人だったとか・・・

店には張り紙がしてあった

「店は開けておく、人喰い病に備えて誰でも武器を持って行くとい
い」

「流石はヴェンだな！気前がいいや」と感心するアンディ

「カランカラン」と入った時に音がする

それは、ガンシヨップとは思えないどこか癒しの音だった

「何人が入った形跡があるな・・・」「ていうか武器何にすっかな」

「テレビの化け物を見る限り動きは遅いんだよな・・・ただ住民が
化け物になるなら弾が多い方がいいよな」

アンディは瞬時に判断し、弾薬の多いマシンガンを手取る

「あまり大きくてもいかなから、小さいの2丁だな！カッターな！
！」

「んじゃ、マガジンも貰うぜヴェン」

マガジンも2つ取っておいた

「さて、と」「次は車」

ここから歩いて数キロあるところにカーシヨップがある

その辺に車は放置されているがエンジンがつかないから意味がない

やはり歩いて行くしかなかった

「自転車とかあればな・・・」とアンディはぼやく

残り3時間30分

1時間もあればカーシヨップだからやはり余裕だと思った

「やつぱ街の中心街じゃねーから化け物と出くわさんな・・・」

つかつかと20分歩いていたら時だった

「グルルルルル・・・」

「んー？」と後ろを振り返る

「！！やべえーなこれ」

ケルベロスが3匹

人間の臭いにつられてやってきたのだろう

「おいおい、犬まで化けもんになるのかよ！聞いてねーぜ」

数秒ほどの沈黙が続き、ケルベロスは一斉に向かってきた

カチャ、ドドドドドン

マシンガンの2丁攻撃

流石の化け物も蜂の巣だ

バタツ、と3匹は倒れた

「やっぱりマシンガンで良かったわ」「ハンドガンだけだったら死んでたな・・・」

バサツバサツ

「ん？またかよ」「ってカラスも化けもんかよもしかして」

銃声に反応してクロウの群れがやって来た

「人喰い病の人間を喰って感染したとかそんなんだろどうせ」

飛んでいる奴には中々当たらないと判断したアンディは逃げ出した

「カーカーカー」

「痛てっ、おいおいジャケットが破れやがった!」

クロウのついでにジャケットが破れた

頭など突かれたらひとたまりもない

アンディは逃げながら発砲することにした

ドドドドド

パタッパタッといくつかのクロウは落ちてゆく

「――おし着いたカーシヨップ」

実に30分以上も走り続けたアンディは中々のものである

「ハアハア・・・くそ、鍵か・・・」

カーシヨップは当然閉まっていた

ドドド

マシンガンで鍵を壊す

「フー、カラスから逃げ切ったか・・・ハアハア」

ジャケットはボロボロ、ジーパンも穴が空きあざだらけ

服から突かれたのであざで済んだが、生身だったら肉が抉られていた

ガレージの中には車があるだろう

しかも鍵がなくてもエンジンがつく

電気をつける

パチン

「!!!!!!!!!!!!!!」

人型の化け物!!!

「ガレージの中に!!!!!!!!!!」

5体の従業員ゾンビである

カチャ、引き金を引く

カチャ

「!?!」

もう一度

カチャ

「まさか!?!」

そのまさか

「弾切れ」

30分もの間、少しずつとはいえ連射していたマシンガンはマガジンを含め空になっていた

「おいおい・・・」

自信家のアンディも流石に涙目になっていた

「いや、すぐに車に乗り込めば・・・」

ボタン

ブルルルン

エンジンをかける

窓ガラスにはゾンビ達が群がって叩いている

その直後アンディはさらに泣きたくなる

「ピーピーピー、防犯ロック作動」

「ハンドルをロックしました」「パスワードを入力して下さい」

こればかりは、「最新技術」とやらを恨んだ

「ちよっ・・・待てよ！！なんでこんな時に・・・」

手汗が尋常じゃない

バン、バン、バンと知能低下した化け物共がガラスを叩く

強化された力は、あと数十回叩けばガラスが割れるのを物語る

「××××」と手早く入力

「ブーブー、パスワードが違います」

「くそっ、くそっ、くそっ・・・」

「××××」

「ブーブー、パスワードが違います」

「××××」

「ブーブー、パスワードが違います」

アンディは完全にパニックになった

頭の中は真っ白

その時

ガシャアアアン

窓ガラスが割れた

・
・
・
・

ブーンという音と共に車は発信していた

というより気が付いたらアンディは道路を走っていた

最後に無意識に打ったパスワードは正解していた

「ハアハアハア・・・助かった〜」

「ん？ちょっと待てよ・・・」

「いね、」

「俺の車じゃあん！！！」

パスワード「アンディ」

ほっとしたアンディはちゃっかり持ってきた缶コーヒーを口に安堵していた

こうしてアンディは無事に街を出た

バイオハザードSeven Survivor1(後書き)

ありがとうございました

感想・評価お待ちしております

バイオハザードSeven Survivor2（前書き）

2人目の生存者の話

バイオハザードSeven Survivor2

・
・
・

気がつく、血の臭い

ぼんやりとした意識の中血の臭いが異様に気になった

自分から出ている血、いや、それだけじゃない

仲間の血の臭い

「・・・クツ・・・」

ゆっくりと意識が戻っていった

周りを見渡すとそれは地獄絵図だった

特別警察のメンバー6人が全滅だ・・・

そう、特別警察副隊長エドウィンだけがかりうじて一命を取り留めていた

少しおかしい

エドウィンは自分で思った

腕時計を見ると日付が2日経っていることになる

この出血、時間の経過からして死んでいてもおかしくない

というか他の隊員のように普通は死んでいるハズだ

「・・・出血している部分に致命傷がなかったってことか？」

だが、ろっ骨などいくらかの骨はハイドにやられているのが分かった

「まあ、丈夫なのが取り得なもんだからな・・・」

ゆっくりと腰を上げて立ちあがった

やはりろっ骨やら打撲、切り傷、銃弾による傷などと命は取り留めてこそいるが

絶対に安静が必要だった

が、そんなことは言ってられなかった

先ほど携帯からニュースを見た

24時に爆弾が投下されるというものだ

今の時間は21時過ぎ

もう少し寝ていたら確実に爆弾の餌食になっていた

一番マズかったのが、入口に続いている道がふさがれていることだ

った

よって地下の奥を進むしかない

知らない道に、この怪我に化け物共、さらにはタイムリミット

心理的には相当負担が掛かるに違いない

「諦めるわけにはいかない、死んだ仲間の為にも・・・」

当然、ハイドはいない

一緒にハイドと戦っていた化け物もないところを見るとコントロール可能な化け物なのかもしれない

特別警察をハイドと一緒に全滅させるほどの実力だ

街中で悪用されたら被害は大きいだろう・・・

武器を手に取りエドウィンは奥へ進んで行った

仲間の武器の弾薬は尽きていた・・・弾のわずかな自分の武器を手
に・・・

奥に進んで行くと、研究していた痕跡が多く見つかった

レポートなどを読んで進みたいところだが時間がおしている

そのまま前進していった

ズル、ズル、ズルとズボンのすそを引きずる音がした

こっちへ向かってくる

血の臭いに反応したのかもしれない

そう考えると2日意識の飛んでいたエドウィンが生きていたのは不幸中の幸いかもしれない

「相手にしている暇はない・・・」

急ぎ足で進んだ

「ここは、どこに繋がっているんだ？」かなり歩いたエドウィンは思った

病院の地下から入り、反対側に向かって歩いているのだが中々出口が見えない

「22時24分・・・あと1時間30分か・・・」

ズキズキと色々な個所の傷が痛い

疲労、怪我、時間、心理的不安、精神的ショック、弾薬不足、ここまで苦しい任務は初めてだ

「!!!!ちっ」

前方に研究員ゾンビ3体

弾はあと9発

しかも、ハンドガンでもうマガジンはない

このトンネルの広さ

2体なら無視できるが3体となると厳しい

「お前らにやる弾はないんだよ!!」

エドウィンはギリギリまで3体のゾンビを引きつけた

知能の低いゾンビは、自分が喰う、自分こそ、と言わんばかりに――
斉に襲ってきた

そのタイミングを狙ってエドウィンは避ける

3体の低知能はぶつかり合いよろけた

「今だ!!」

トンネルに出来た隙間からゾンビ達をまいた

ポタ、ポタ・・・

「出血・・・か」

小さな点々を地面に垂らしながら進んで行った

22時48分

ようやく出口が見えた

「ここで最後か・・・」

ドサッ

「！！！！」

もうお決まりかのようにハンタータイプ2が現れた

「お前を倒して脱出してやる！！」

このハンタータイプ2は爪が無かった

捕獲用のハンターだった

抵抗する人間を死なないように攻撃して捕まえるハンタータイプ2

実験するにおいて必要な存在だった

代わりに鈍器のように腕は発達していた

ダッ

ハンターは駆け出す

ブンッ

腕を力任せに振る

エドウィンは痛む体にムチを打って避けた

ドゴン

トンネルの壁が崩れた

「・・・当たるとマズイな」

カチャ、バンバンバン・・・

頭に9発

「流石に死なんか！」

弾は空っぽ

ブンッ

ハンターの2発目

来た！とエドウィンはしっかり見ていた

だが、傷が痛む

「うぐっ、こんな時に・・・」

ドゴン

エドウィンの腹部に命中

まるで、金属バットでプロ野球選手にフルスイングされたかのような

「ガハッ……」ボタボタと血が落ちる

ただでさえろっ骨やら他の骨を折っているエドウィンには相当こたえた

「うつっ……」気絶してもおかしくない痛みが走る

実際意識が飛ぶ寸前だった

「お、おれは……」

「こんな……とこ、ろで……」

「仲間」という言葉がエドウィンの頭に過る

その瞬間意識が戻った

「仲間の死を無駄に出来るかアア!!!!!!!!!!」

渾身のパンチを繰り出す

ハンターの何度も銃を撃たれた所に命中した

ガゴン

ハンターはフラフラし

バタッ

崩れていった

「よしっ、ハアハア、今のうちだ」

エドウィンはハシゴを上った

出た先は病院から離れた路地裏の場所

車を見つけ中に入ると運よくエンジンまでついた

ブルルルン

「すまねえ車貰うからな・・・」

23時36分

エドウィンは街から脱出した

運転中たくさんの化け物達を見たが、生存者はいなかった

飛びそうな意識の中、ウォードとラムの安否が心配になっていた

「必ず、生き延びろ・・・!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6646w/>

バイオハザード

2012年1月14日18時52分発行